

文部科学省特別選定
学校教育教材・社会教育(教材)

認知症と 向き合おう



監修

川崎幸クリニック院長
公益社団法人 認知症の人と家族の会
副代表理事

杉山 孝博

上映時間30分 字幕版付き

DVD 本体価格 66,000円(税抜)

解説シート付き [C#3397]



東映株式会社 教育映像部

〒104-8108 東京都中央区銀座3-2-17
<http://www.toei.co.jp/edu/>

企画意図

高齢化の進展に伴い、認知症の人が、今後更に増加することが予測されています。一方で、多くの人たちが認知症に対して知識不足であり、偏見を抱いているのではないのでしょうか？確かに認知症の人の行動は不可解であり、その気持ちや行動の理由を理解するのは大変なことです。しかし、認知症の人の立場に立てば、どんな行動にも本人なりの理由や思いがあります。健康な人の常識で認知症の人の言動をおかしいと判断し、改めさせようとすることが、介護する家族と認知症の人の両方を苦しめてしまいます。大切なのは、認知症の人が築いている世界を理解し、尊重することなのです。

本作品は、認知症によくみられる症状、認知症の人の思いと家族の気持ちの変化、症状の理解、介護者の交流の大切さなどを描いたドラマ教材です。認知症の人とその周囲の人、よりよく生きていけるように。認知症について正しい知識を持ち、認知症の人の視点に立って認知症への理解を深めることを目的に制作しています。

内容

認知症の文乃は夫と死別後、娘夫婦（春樹・翔子）や孫娘（樹里）と同居することになる。しかし、ひどい物忘れや徘徊、家族への暴言・暴力といった症状を現す文乃に家族は振り回され、ばらばらになってしまう。

そんなとき、春樹は立ち寄った喫茶店で格別においしいコーヒーを飲み、感動する。しかもマスター（茂）の妻（節子）から、夫は3年前から認知症ですと言われてびっくりする。節子は春樹に次のような話をする。

「認知症って、確かに色んな事を忘れちゃうし、大変な事もいっぱいある。でもその人であることに何も変わりが無いのよ。大切な事はちゃんとして（胸）で覚えてる。悲しかったり嬉しかったり、他の人と同じように一生懸命、生きてるの」

春樹が帰宅すると、翔子と樹里が打ち沈んだ表情をしていた。春樹は樹里から一冊のノートを渡される。その中には、家族の誰もが気づかなかった文乃の思いが散りばめられていた…。

後日、節子に誘われ参加した「認知症カフェ」で、春樹と翔子は、認知症の専門の杉山孝博医師の講演を聞く。

「まず正しい知識を持つことです。認知症の人の世界や気持ちを理解すれば、介護者の苦労は減り、患者さんの症状も改善され、互いに良い関係を築けるようになります」

杉山医師は、基礎知識として次の3つを提示する。

- 記憶になれば本人にとって事実ではない
- 本人が思ったことは本人にとって絶対的な事実
- 認知症が進行してもプライドを持ち続けませ

講演を聞きながら、春樹と翔子の頭の中では、文乃の以前の言動がフラッシュバックする。「あの時の行動は、そういうことだったのか」と、思わず納得する二人。

ある日の夕食。献立はやはり、カレー。しかし今度はうまく受け入れるようになった。認知症を理解しようとし、文乃の気持ちに寄り添っていく春樹と翔子と樹里。文乃の表情にも笑顔が戻る。その笑顔は春樹たちの心をも温めるのであった。



監修

杉山 孝博

東京大学医学部付属病院で内科研修後、患者・家族とともにつくる地域医療に取り組むため、1975年川崎幸病院に内科医として勤務。以来、内科の診療と在宅医療に取り組む。1998年川崎幸病院外来部門を独立させた川崎幸クリニック院長に就任し、現在に至る。1981年からは、公益社団法人認知症の人と家族の会の活動に参加。全国本部の副代表理事、神奈川県支部代表。主な著・監修書に『認知症の9大法則 50症状と対応策』（法研）、『認知症の人のつらい気持ちがかかる本』（講談社）、『親の認知症に気づいたら読む本』（主婦の友社）ほか多数。

プロデューサー 光田雅樹
川越英一
脚本 松島恵利子

監督 保母新之助
撮影 笠原晋
音楽 合田享生

制作協力 千葉エデュケーショナル株式会社
企画・制作 東映株式会社 教育映像部

予告編配信中!

<http://www.toei.co.jp/edu/>

教育映像

検索

2016年作品

5